

2019年2月5日

学力向上推進委員会 委員長様  
委 員様

### 全国学力・学習状況調査と学力問題に関する意見書

愛知県教職員労働組合協議会  
議長 岩澤弘之

すべての子どもに確かな学力を身につけさせるために、議論を積み重ねていただきありがとうございます。

昨年8月、大阪市の吉村市長は、全国学力・学習状況調査（「全国学力テスト」）の結果が政令指定都市で最下位になったことを受け、その結果を教員のボーナスや学校予算に反映する方針を表明しました。「序列化や過度の競争が生じないようにする」（実施要領）に反する事態が際限もなく広がっています。

一方で、県独自の学力テストをやめるなど、学校や子どもたちへの負担を減らす取り組みも進んでいます。

今回の意見書では、子どもの自死を繰り返させないために、あるいはいじめを防止するために、何が求められているかという観点から、全国学力テストと学力問題についてまとめてみました。以下に取り上げる意見書や報告書は、子どもが命をかけて訴えようとしていたことを代弁するものです。ぜひ貴委員会での論議に生かしていただきたいと思います。

#### Ⅰ 「学力日本一」で学校と子どもは…福井県議会意見書より

2017年（H29）年3月、福井県池田町池田中2年の生徒が、登校後、校舎の3階から飛び降り自死するという痛ましい事件が起きました。同年10月、自死の原因は、教師の指導が適切でなかったことにあるという報告書が出されました。

同年12月、福井県議会は、「福井県の教育行政の根本的見直しを求める意見書」を全会一致で可決しました。その中で、次のように、教師の不適切な指導の背景には、学力偏重があったのではないかと指摘しています。

「池田中の事件について、学校の対応が問題とされた背景には、学力を求めるあまりの業務多忙もしくは教育目的を取り違えることにより、教員が子どもたちに適切に対応する精神的なゆとりを失っている状況があったのではないかと懸念するものである。」

さらに、池田町だけではなく、次のように、「学力日本一」を目指すことが、福井県全体の問題となっていると指摘しています。

「このような状況は池田町だけにとどまらず、『学力日本一』を維持することが本県全域において教育現場に無言のプレッシャーを与え、教員、生徒双方のストレスの要因となっていると考える。

これでは、多様化する子どもたちの特性に合わせた教育は困難と言わざるを得ない。

日本一であり続けることが目的化し、本来の公教育のあるべき姿が見失われてきたのではないかと検証する必要がある。」

## II 全国学力テストと競争的教育システムの見直し求める…青森市いじめ報告書より

2016年（H28年）8月、青森市の中学2年生葛西りまさんが、自ら命を絶つという痛ましい事件が起きました。2018年（H30年）8月、青森市いじめ防止対策審議会は、次のように、二度とこのような事態が起きないことを願って、報告書を作成しました。

「国等においてもこれを是非受けとめて頂き、ひとりでも、いじめで苦しむ児童生徒がなくなことを期待し、少なくとも青森市内の学校において、もう二度と、こうした事態が起こることがないように祈念しつつ、改めて、亡くなられた生徒のご冥福を祈りたい。」

報告書では、次のように、国に対して、全国学力テストと競争的な教育システムの見直しを提言しています。

「国は、全国一斉の学力・学習状況調査が学校現場の競争的環境の一因となっていることを踏まえ、また競争的学校環境が児童生徒にストレスを与えていることを踏まえ、その実施を含めた学力・学習状況調査のあり方について再検討するとともに、子どものいじめ、自殺、精神疾患等を引き起こす過度な競争をなくすための教育システムの構築に向けての抜本的改革に取り組まれない。」

## III いじめを防止するために…「わかる授業づくり」を

以上まとめますと、いじめや自死を防止するために、国が全国学力テストなどの競争的な教育システムを改めることが求められています。では、各学校では、どのような取り組みが必要なのでしょうか。

国立教育政策研究所は、いじめを防止するためには、「わかる授業づくり」を進めることが大切だと指摘しています。誰もが分かる授業によって、いじめだけでなく、不登校も減らすことができると考えられます。（生徒指導リーフ「いじめのない学校づくり」H25. 11）

「具体的には、わかる授業づくりを進める、全ての児童生徒が参加・活躍できる授業を工夫する、といったことから始めましょう。」

児童生徒にストレスをもたらす最大のストレスは、友人関係にまつわる嫌なできごと、次いで人に負けたくないという過度の競争意識であり、勉強にまつわる嫌なできごとが続きます。<sup>5)</sup>児童生徒が学校で過ごす中で一番長いのは、授業の時間です。授業が児童生徒のストレスになっていないか、授業の中で児童生徒のストレスを高めていないか、言い換えれば、授業中に児童生徒の不安や不満が高められていないかというのは、授業改善の大きなポイントです。だからこそ、わかる授業づくりを進めることから、なのです。」

各学校で誰もが分かる授業を進めるためには、教員ひとりひとりが十分な時間を持って教材研究に取り組むことができる必要があります。そのためには、教員の多忙化を解消することが求められています。また、すべての学年での少人数学級の実現や教職員の増員が必要です。このような条件整備を行うのが教育行政の役割であると考えます。

以上